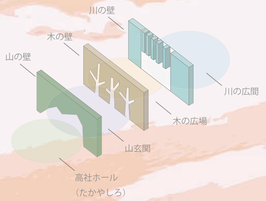
KIJIMADAIRA VILLAGE CENTER

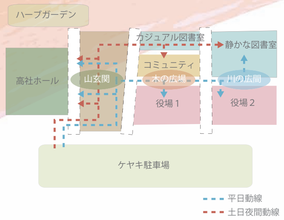
● 3つの壁で生まれる木島平らしさ

木島平は、美しい山々、木々に囲まれ、澄明な川が流れる高原である。木島平らしさとはこうしたイメージの建築的な創造であり、こうした眺望の獲得であろうと考えた。
そこで耐震壁を兼ねる3枚の壁に山、木、川のイメージを創りあげ、それらを山の壁、木の壁、川の壁と名付ける。そして、これらの壁によって「高社ホール」「山玄関」、「木の広場」、「川の広間」を創出する。



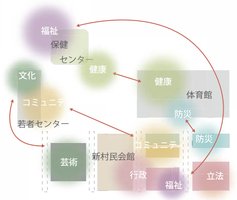
● 使用時間帯を考慮したゾーニング

本施設に含まれる4つの機能は使用時間帯が異なる。ホール、コミュニティ・センターはリクエストベースで毎日朝から晩まで。図書館は週一日休館で朝から晩まで。役所は月～金の9時～5時である。そこで役所が使われない土日、あるいは5時以降の他施設の使用が可能となるように山玄関から直接ホールと図書館に入り、図書館のカジュアルゾーンを経てコミュニティ・センターに到達できる動線を用意した。



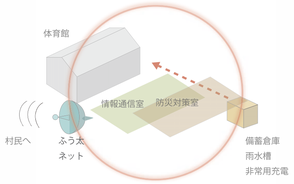
● 既存施設との有機的な役割分担

敷地周辺には3つの施設があり以下の役割を担う。体育館→健康、防災。若者センター→文化、コミュニテイ。保健センター→健康、福祉である。これらに対して本施設は他施設のすべての機能をバックアップしながら行政、立法、芸術の拠点として周辺施設と協調しながら村民を全面的にサポートしていく。



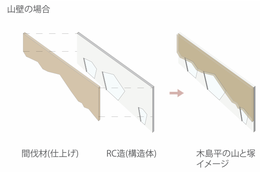
● QOLD を重視した防災拠点計画

防災対策室は、災害時の拠点として災害時生活の質：QOLD（Quality of Life at Disaster Occasion）の向上に務める。そこで地域の支援情報（生活必需品の供給場所、時刻など）を「ふう太ネット」で発信する。非常用発電による電力、雨水濾過による飲料水などは3日間の供給を可能とする。防災対策室は平時には会議や防災学習のためのスペースとして使用する。



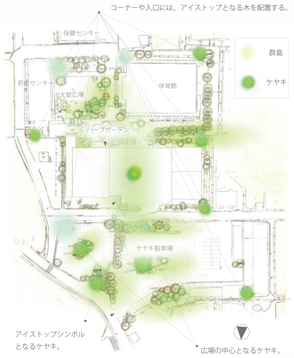
● 林業の発展を促す木材使用計画

県産材であるカラマツの流通材を構造材として使用する。一方、木島平産の杉および間伐材は本施設のイメージを創り上げる3つの壁の仕上げ材、事務所、図書館の家具、また燃料ペレットとしての使用も今後の検討課題とする。そうした使用を通して地元林業の再生、活性化のきっかけとしていく。



● 敷地南北を貫く緑の群島計画

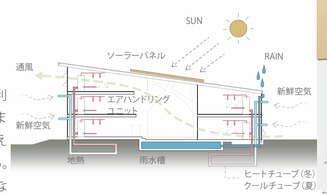
敷地南北の機能的連続性に合わせた南北一体のランドスケープを提案する。既存樹木位置を基準に緑の島を構成しそれらを群島のごとく連続的に配置する。樹種は在来種を基本とし、高木はケヤキを中心にブナ、コブシなど、下部には低木、地被類を混植する。陽性のユキヤナギ、シバザクラなど、陰性のシャクナゲ、ヤブラン、ベニシダなどを用いる。また建物内にも外来種を加え生育可能な樹種を選定していく。

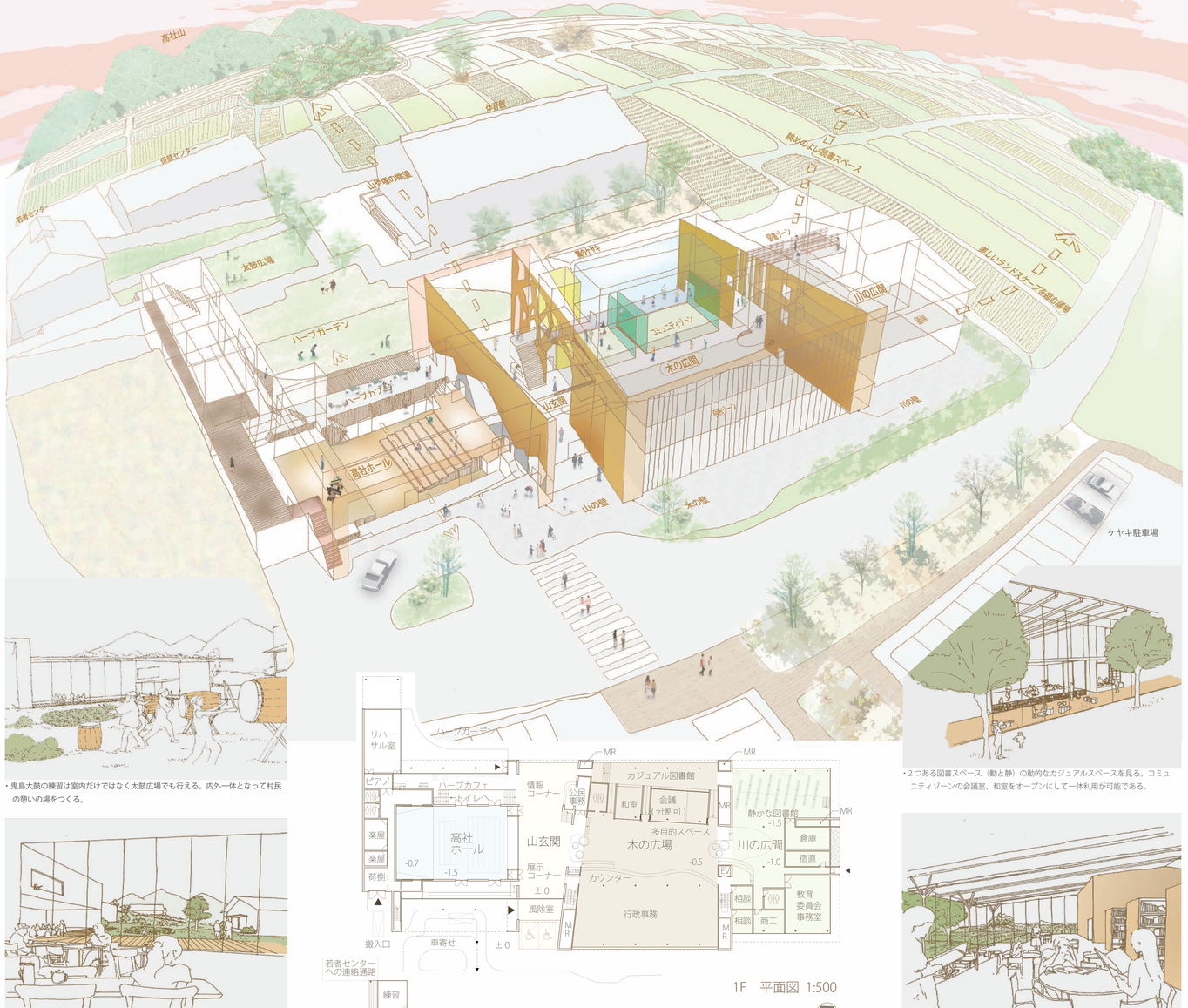


樹木種類
常緑高木：マツ、キンモクセイ
落葉高木：ケヤキ、サクラ、コブシ、カエデ、ブナ、ヤマボウシ、シャロノキ
落葉低木：ユキヤナギ、エゴノキ、コデマリ
多年草：サクラソウ
双子葉植物：アジサイ
ハーブ：ローマンカモミール、クリーピングタイム、スイートヴァイオレット、ペリウィンクル、コルシカミント
料理用：バジル、ローズマリー、チャイブ

● 省エネで環境に優しい設備計画

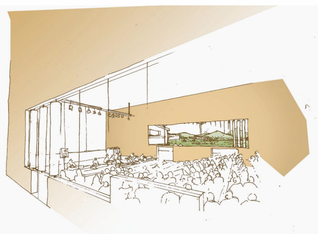
地下熱源＋各階機械室＋スラブ下ダクトから冷湿風をサプライしリターンを床下でとる。温度、湿度コントロールを細かに行い、省エネにつなげる。
環境エネルギー利用として、雨水、井水の利用、太陽電池設置可能な計画としておく。また断熱性能を高め外乱の負荷を最低限に抑え地熱利用、ナイトパージを積極的に活用する。また3枚の壁による空間分割を利用し細かな空調発停を行い省エネにつなげる。



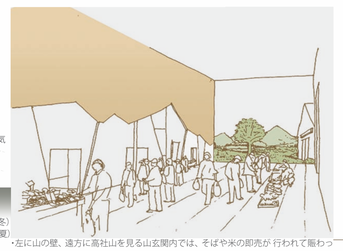


・鬼島太鼓の練習は室内だけではなく太鼓広場でも行える。内外一体となって村民の憩いの場をつくる。

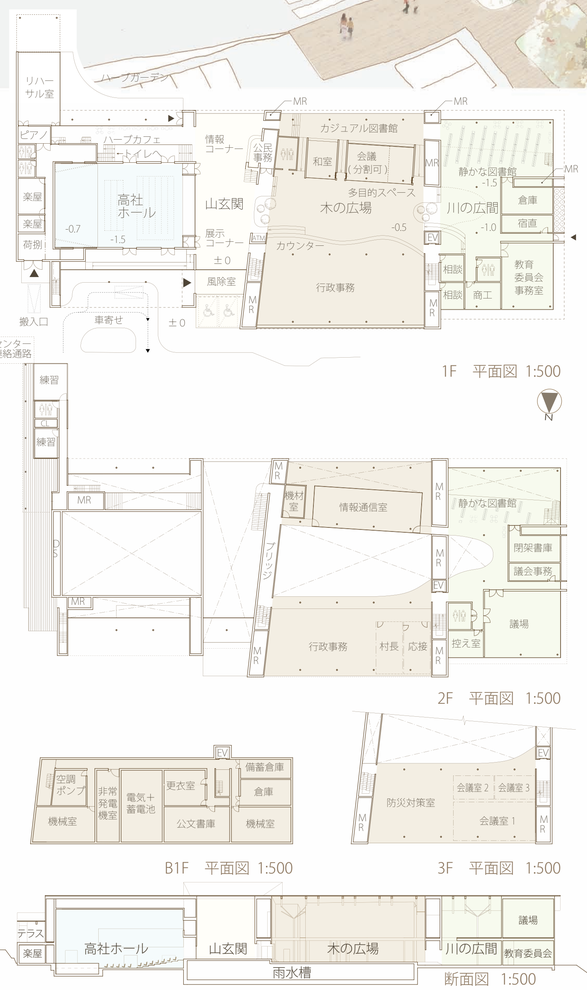
・ハーブガーデンを見るハーブカフェからはリハーサル室の中も一望できる。



・高社ホールは周囲より1.5m低く、中の様子が見えて、透明感の高いホール。ガラス開口は木製可動ルーバーで暗転可能。



・左に山の壁、遠方に高社山を見る山玄関内では、そばや米の即売が 行われて賑わっている。



・2つある図書スペース（動と静）の動的なカジュアルスペースを見る。コミュニティゾーンの会議室、和室をオープンにして一体利用が可能である。

・川の広間側にある静かな図書スペースは落ち着いて本が読めて、塚や田んぼの景色が臨める。

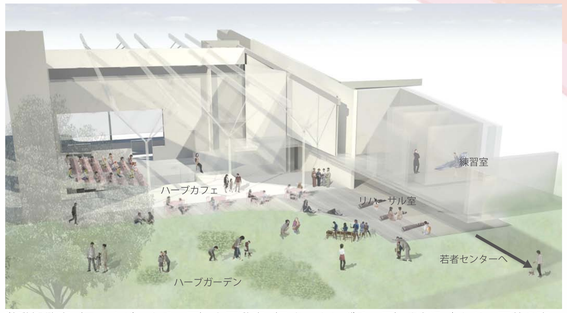
・防災対策室は、村の災害情報を集約し、平時には会議室、防災学習スペースとして使用する。

・山玄関の木の壁をくぐると木の広場の両側にコミュニティゾーン、村役場が展開する。

● 動と静の図書館

気軽に立ち寄れる図書館を目指し、入口は「川の広間」「山玄関」双方に設ける。山玄関側はカジュアルで動的なスペースとし、隣接する会議室との一体利用を可能とする。川の広間側は静的なスペースとして、一階には閲覧室、二階には学習室を配置し、南西の眺望を望む。

● 多目的に使いやすいホール

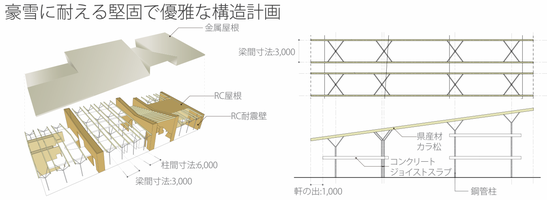


移動観覧席（ロールバックチェア）と可動席（スタッキングチェア）を組み合わせ、天井の高いシューボックスタイプとする。響きの良い音楽中心のホールだが、昇降舞台によって、平土間となり、展示、集会、映写会などに利用できる。山玄関から1.5m下がったホールは、ガラス越しに見降ろせる、開かれた明るい空間である。但し、ガラス面には可動木製ルーバーを設け、暗転可能とする。リハーサル室、練習室はハーブガーデンに面して配置し、単独利用が可能な計画とする。特にリハーサル室は、太鼓練習など屋外空間との一体利用を考慮する。

● 村民の声が響く木の広場

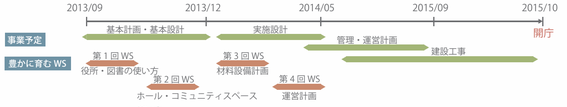
木の広場の北側は3層の役所スペースとし、1階のワンストップ窓口で迅速な対応を可能とする。また2階に村長室、議会を設け3階は災害対策本部とする。木の広場南側は1階にコミュニティスペースを設け、村民が気軽に立ち寄れる明るく透明感のある部屋とし、2階の情報通信室ではローカルテレビの収録風景が外から見えるような作りとする。

● 豪雪に耐える堅固で優雅な構造計画



RC造を建物の各所に配して耐震要素とし、屋根の大部分を県産材カラ松（400×200）で構成する。ハイブリッド木質構造とし、木造を経済的に利用する。RC造耐震壁は、南北軸に4列、東西軸に4列の平面的にバランスよく配置。屋根は無落雪型として、積雪2メートルの荷重を考慮する。6×12メートルピッチで鋼管柱を配置し、柱は上部で4本の頬杖に枝分かれさせ、木造梁のスパンを小さくすることで経済性を確保する。屋根勾配は1.5寸の片流れ金属屋根を原則とするが、切妻を併用し適正な内部空間を確保する。来訪者を迎え入れるホール部北側。3層に積層した役所部。山岳風景を取り込む玄関部南側を片流れの水上としている。

● 基本から実施へ連続するきめ細やかなワークショップ計画



基本設計時には役所、図書室、ホール、コミュニティに生まれるであろうアクティビティの想定と建築について、実施時には、材料設備運営計画についてワークショップを行いたい。